

Title	セム人の発生地の問題 : Grintzによる批判的要約
Sub Title	J. M. Grintz, On the original home of the Semites, JNES. XXI, 7, 1962, No.3
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.1 (1963. 8) ,p.107- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630800-0107">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630800-0107</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ことは疑えない。結局マイヤーホフのアンソロジーはガーディナーの *Theories of History* の補追とみればいいだろう。しかし二人の立場はともにソ連圏のマルクス主義の歴史哲学の進展に対しては全然ふれていないので、その方面のものがいつか加えられて全面的なアンソロジーができる日を待ちたいものである。

しかしとにかくだでさえ多義的な歴史哲学をこれだけにまとめあげて、その完全な体系化ということは今まだ望めないまでも、それに至る段階としてもろもろの歴史哲学説の系譜をつくり上げたことは重要な意味をもっている。基礎的な研究に必要な客観的資料を提供してくれるアンソロジーという形式はその学問の発達の度合を示す一里塚である。だから今のこれをひと時代前の Flint, *History of Philosophy of History*, London, 1893 や Bernheim, *Lehrbuch der historischen Methode und der Geschichtsphilosophie*, Leipzig, 1908 と比べてみると、そこに隔世の感があることは誰の目にもわかるだろう。歴史哲学はもうこれだけの地歩を礎いたのだということをおのこの本は言外に物語っている。

### セム人の発生地の問題—Grintz による批判的要約

小川 英雄

セム人の故郷はどこか。他の人種についてもそうであるが、セム人の発生地についても、主として一九世紀以後、有力な学者達の間で幾つかの説が対立したまゝ現在に至った。B. Moscati (*Histoire et civilisation des peuples sémitiques*, 1955, p. 31) の云うように、この問題は現在では以前程議論されなくなっている。何故なら、歴史的な記録の存在し始めた時、セム人は既に広い地域にわたって分布しており（この困難は当然早くから指摘された。cf., Th. Nöldeke, art. *Semitic Languages*, *Encyclopaedia Britannica*, 9th ed., 1886, vol. XXI, pp. 641ff., esp. p. 643）発生地について確定的な証拠が残っていない上に、その後の言語学・民族学・人類学等の方法論上の展開によって、人種の系譜的な流出・分化を簡単な図式で思い浮べることに疑問が持たれたためである。即ち、人類文化の運動は融合・相互作用・分離のより複雑な過程を経るものと考えられるようになったので、この種の問題解明の根本的限界が感じられている。しかし、セム人諸言語の近似性をはじめ、風俗習慣一般の相互の類似は、やはり共通の発生地を仮

定させるのであって、Moscati自身は今日最も広く信じられている通り、セム人はアラビアに於て、“*individualité ethnique*”を形成し、その地から流出したが、それ以前には印欧語族と関係のあるいずれかの地にいたのであろう。と述べている。(ibid., p. 33-43 : 印欧語とセム語の類似点については、例へば B. Hrozný, *Ancient History of Western Asia, India and Crete*, Prague, n. d., p. 52 etc. 参照。)

以下に紹介する論文 (On the Original Home of the Semites, *Journal of Near Eastern Studies*, XXI, 7, 1962, No. 3, pp. 186-210) の著者、ヘブライ大学の Jehoshua M. Grintz も上記の困難を自覚した上でセム人のアラビア起源説について、その根拠とする理論—特に沙漠的生活からの発展の理論を批判することによって、アルメニア南部から北メソポタミアを發生地とする旧約聖書以来の主張(例えば、アルメニアとクルディスタンの間を起源とする)を弁護することを意図するようであるが、その主たる面目はアラビア起源説の諸根拠をまとめた上で、それについて否定的論評を加えている点にあろう。但し、Grintz はアラビア起源説がこのようにまとめて扱われたことはないと述べているが (p. 177), 後出の Hitti や Nöldke の記述でもかなりまとめられており、結局これ等に対する総合的な論難が読みどころと云えよう。

まず、アラビア以外の地を故郷であるとす諸説が要約され

る (pp. 186f)。そこには著者が賛成する旧約聖書 (創世紀・八の四・一二の二) と Berossus を創始とするアルメニア・メソポタミア説の他、北アフリカ説、中央アジア説が述べられているがいずれも簡単であり、ここに記すまでもなからう。挙げられている文献としては、有名な Ignatio Guidi (della Sede Primitiva dei populi semitici, *Memorie della Reale Accademia dei Lincei*, 1875-78, p. 566-615. メソポタミア説) をはじめ Von Kramer (中央アジア説) J. P. Peters (アルメニア説) Nöldke (北アフリカ説) が見える。

次に、アラビア起源説に入る。Grintz の議論の第一の眼目は、聖書考古学の一つの傾向である族長時代のユダヤ人の遊牧生活を一般ベドウィンの生活と切りはなそうと云う主張 (cf. W. F. Albright, *Archaeology and the Religion of Israel*, Baltimore, 1942, pp. 97f. etc.) にたすけられて、Philip K. Hitti, *History of the Arabs*, 1937. (特に Chapter 1 : The Arabs as Semites ; Arabia the Cradle of the Semitic Race, pp. 3-13) に見られる、断定的な (ユダヤ人の Grintz からの見ると) アラブ民族主義の「政治的偏向」(p. 187) であるところの) アラビア起源説に反対することであるように見える。それ故、まず Hitti の主張を概観しよう。

西南アジアの歴史は定住民と定住しようとする遊牧民との永続的な斗争の歴史であり、従ってアラビア沙漠は、セム人種の

みならず、セム系文化發生の源である。アラビアで形成された「セムの生活」がユダヤ・キリスト・マホメットの三宗教の母胎である。だから、セム人の代表者はアラビア人であり、セムと云うとすぐ思い浮かべがちなユダヤ人は、移住したアラビア人とヒッタイト系の原住民との混血児である。これに対して、アラビアではセム人の言語的・社会的・心理的・生物学的な原始的特性が土着のまま純粹に保持された。かくて、旧約聖書のメソポタミア起源説は誤りであるばかりか、牧畜・遊牧の生活から農耕生活に向うと云う社会学の法則に一致しない不条理である。Hittiは更に、Grintzが“cataclysm”と呼ぶところの千年毎のアラビアからのセム人の流出(即ち、H. Winckler, Die Völker Vorderasiens, 1903, の説くところ)に従つて、西紀前三五〇〇年頃エジプトに入り、ハム人と混血したセム人、同二五〇〇年頃のカナン人(フェニキア人)を含むアモル人、同一五〇〇年に始まるヘブライ人・アラム(シリア)人、同五〇〇年以後のナバテア人、西紀後六〇〇年以後のイスラーム)を挙げた後、その原因は人口の定期的な過剰であるとする。尚、Moscatiと同じく、測り難い過去に原始セム人がアラビアにいなかった時代のあつた可能性を認め、G. A. Burton(Semitic and Hamitic Origins, Philadelphia, 1934)の説に従つて、本源を東アフリカに求める。

Grintz は第一に遊牧民の定住運動と云われるものについて

#### 批評と紹介

(一)社会学の法則としての不備 (二)史料の不完全の二つの面から批判を加え、それがセム人の由来を説明するのに不適當であるとした後、セム語学・體質人類学・宗教史等の各方面についてアラビア説の不利、アルメニア説の有利を立証しようと試みている。ヘレニスティック時代のオリエント沙漠周辺地帯についても看取される通り、セム人世界の一つの普遍的運動として遊牧民の定住運動がアラビア沙漠から沃地に向けて常に行われていた。この地理学的事実が上記のような千年毎の“cataclysm”として理解され、それによってセム人世界が形成されたとすれば、この運動こそセム人の故郷から発しているとしなくてはならない。こうした生活形態の時間的地理的な發展をもとにしてアラビア起源説を出したのが、A. Sprengler (Die alte Geographie Arabiens—Grundlage der Entwicklungsgeschichte des Semitismus, 1875 etc.) であり、以後その他の分野(後記)の証拠とあわせて、同説が最も有力なものと考えられている。これは結局 Grintz が云う通りイスラームの歴史哲学者 Ibn Khaldunの社会学であり、それをセム人起源問題に應用したのに他ならないが、Grintzはこの説の論理は、(一)アラビア人はアラビア半島から来た、(二)アラビア人はセム人である、(三)故にセム人はアラビア半島から来た、と云う三段論法がもとになつていと云う。その通りとしたら素朴にすぎると思われるが、Grintz はそれを破るために、ヘブライ人、アラム人、

アシリア人、バビロニア人等の間にアラビア沙漠出身であると云う自意識がなく、又歴史時代に入ってから各セム人の定住位置が様々であったと云う事実を色々と挙げる。しかし、このような古い時期の問題では二三の史実よりも、それを使って展開する推論の鋭さが大切であり、史料に書かれるようになった時、スメル人がセム人よりアラビアの近くにいた、と云う風なこととは余り問題にならないであろう。そこで Grintz は Khaldun 的理論の克服にのり出すが、その方法は上記の通りに各民族の遊牧生活やその運動が同じ水準にあるものではなく、一貫した法則性が、そこに働いていないことを示すにある。即ち、沙漠から沃地周辺に入り込んで定住に成功したことの明確に分る、定住民の典型としてナバテア人〔史学〕Vol. 33, Nos. 3-4: Vol. 34, Nos. 3-4 等の拙稿参照〕があることは認めるが、この場合は、他の沃地セム人と同じく、アラビア本土に住んでいたと云う証拠を欠くし、むしろ、アシリアの文書の Nabateate 等からわかるように、もともとイドウメアにいたのだ、とすることに よって「典型」を「例外」に化した後で、まず、ナバテア人等の ゆっくりとした定住化・文明化とアラビア人の定住運動の代表的なものとされるイスラームの征服とは根本的に異ると主張する。即ち、後者はもと／＼開化していたのであり、ベドウィンとは異なる上、定住理論の説明となるような経済的・人種的な原因 (Weber) はなく、「空想的な宗教的信念」によるものである

つた。「イスラームの戦争はアラビア半島の諸民の最初にして最後の out-burst であった。」その他の移動は小規模のものであり、歴史理論的価値はゼロである。「故に、各一千年毎に起る、"cyclic cataclysm" の全仮説は全く根拠がない。」(p. 192) もし、そうだとすれば定住化理論は一定の法則性を内容として持たないことになって破壊される結果になる。では、旧約聖書の族長たちの遊牧生活をどう評価すべきであろうか。この点については既に述べた通り、ヘブライ人の遊牧生活とベドウィンたちの生活とは、後者の定住化とイスラームの沃地侵入とが別ものであるのと同様に、根本的に違っている (profound difference)。即ち、ベドウィンは移動のためばかりなく、衣食住全てラクダに依存し、農耕に反対し、定住生活をいとうのに対し、ヘブライの族長の遊牧では、ラクダは単に運搬用であり、文明地周辺で生活し、いつでも農民になる用意があり、アラビア的生活ではなく、メソポタミア的生活により多くなじんでいる。両者は生活圏が違っているから同じ定住運動の型に入れることが出来ない。

次に、Grintz は Sprengler 以来の定住化理論の大きな根拠である、遊牧民から農民への生活形態の片道的移行、即ち、その逆の場合はあり得ない、と云う主張について、北米やアフリカの土着民の例や最近のアラビア人やユダヤ人の生活形態、特にアラビア人の「新たなベドウィン化」が起っていると云う報告

(W. Caskel, Zur Beduinisierung Arabiens, ZDMG, C III, 1953) をあげ、又、セム人史上遊牧生活が必ずしも先行する生活形態ではなると云ふ主張 (F. M. Heichelheim, G. Widengren, K. J. Narr) を紹介している。そして、狩獵→牧畜→農耕と云う各段階を経て人類史が発展すると云う考え方を Lucretius にさかのぼって概観し、それをダーウィニズム的な進歩のパターン (preconceived world order) にすぎぬとする。

セム語学上の根拠をもとにして、アラビア起源説を述べたものに E. Schrader (Die Abstammung der Chaldäer und die Ursitze der Semiten, ZDMG, XXVII, 1873) がある。一九世紀後半以後、cuneiform の解読等により、アシロ・バビロニア、ヘブライ、アラム、エチオピアの各語の近縁関係が明確になったことから原始セム語が設定されて、アラビア語が最もそれに近いとされるようになったのである。Grintz は古いセム語の形を示すといわれるウガリット語の発見や南アラビア語がアラビア語よりもヘブライ語に似ていると云う事実をもとにして、北アラビア語は北方から進出したセム人の言語を土着民が継受したものであり、南アラビアとは根本的に異なる文化をになつてゐる、と云う。

次に、体質人類学上の根拠として、C. U. Ariens Kappers と Leland W. Parr (An Introduction to the Anthropology of the Near East in Ancient and Modern Times, Am-

sterdam, 1934) を引用して、dolichocephalic のアラビア人型よりも、brachycephalic のアルメニア人型の方が純粹にセム的であると述べ、又、宗教史上の問題に移つては、一九世紀後半に Renan や Wellhausen によって、ヤハウェ宗教の由来について立てられたアラビア起源説に反対する。総じて、シリア沃地への入口に通ずる北アラビアの住民が宗教的、言語的に南アラビア人及びヘブライ人・シリア人等に対して特異な点を示していたことが伺われる。

さて、以上のような議論によつて、セム人のアラビア起源説は十分否定されたであろうか。個々の事実については、例えば Nabatea 時代のシリアの Hauran 地方に、南アラビアのサバ人の定住集落があったこと (cf., Dussaud, Les arabes en syrie avant l'islam, 1905, p. 10) 又、A. Grohmann が指摘する通り、Nabatea 人の故郷が南アラビアか、或はイドウメアかについては、アラム人やヘブライ人の由来と同様確定し得ず、Grintz が述べているアシリアの文書の Nabatae と Nabatea 人の関係も不明瞭と云うべきであること (Realencyclopädie der Altertumswissenschaft, Art. Nabataioi) 等々議論はつきないであろうが、このような史実は、最近の Mari の発掘が示すように、より古い時代に史料がさかのぼりつゝあるとは云え、やはり困難を解決するものではないであろう。そこで問題を Grintz が Khaludun 的な定住化理論を十分克

服し得たか否か、であるが、単に異説や個別的な事実の引用によって批判するだけで、自分の主張するアルメニア・メソポタミア起源説の裏付けは推論が不十分のようである。特に、Khalidunの社会学の中にある“arab”と云う言葉の普遍性を無視して、純粹のアラビア人にだけ限っていること（この点について、拙稿「史学」Vol. 33, No. 3-4, p. 168 参照）や定住化を単に暴力的な侵入とだけ考え、より深い社会的原因を考えないこと、ヘブライ人の沃地定着と他のベドゥインのそれを別ものと

するのにはDussaud, Dupont-sommer, N. Glueckその他の有力な学者たちが、アラム人やナバテア人の定住運動をもって、史料に欠けるイスラエル族長たちの定住過程を知るためのAnalogyと看做して来たことに対する見解が示されていないこと、又Khalidun的な定住化理論は必ずしもセム人の起源の問題を中心として立てられたものではなく、むしろ部族社会から古代国家への過程を説明する理論とも解されるが、その点の説明が不十分なこと、等々が感じられた。

執筆 者 紹 介

清 水 潤 三	慶応義塾大学文学部教授
三 橋 富 治 男	千葉大学文理学部教授
鈴 木 公 雄	慶応義塾大学院博士課程
森 岡 敬 一 郎	慶応義塾大学文学部助教授
武 田 勝 蔵	武蔵工業大学教授
神 山 四 郎	慶応義塾大学文学部助教授
小 川 英 雄	慶応義塾大学文学部助手